



TITLE:

古代に於ける植民史訓

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 古代に於ける植民史訓. 經濟論叢 1920, 10(6): 858-864

ISSUE DATE:

1920-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127662>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷十第

行發日一月六年九正大

論說

財産税の利弊

法學博士

神戸 正雄

鎌倉時代の家族制度(五)

文學博士

三浦 周行

Jan de Witt に就て(二・完)

法學博士

財部 靜治

襲自珍の農宗說

文學士

小島 祐馬

明治の米價調節(七・完)

法學士

本庄 榮治郎

人格主義の立場に於ける經濟と人生の考察(一)

法學士

石川 興二

時事問題

目下の恐慌及び失業

法學博士

戸田 海市

恐慌の對策と銀行業者

法學士

大森 研造

雜錄

北米合衆國に於ける農耕地

法學博士

高岡 熊雄

汐見法學士に答ふ

法學博士

武藤 山治

經濟生活の道德化

法學博士

神戸 正雄

古代に於ける植民史訓

法學博士

山本 美越乃

附錄

本誌第十卷總目錄

去に關する讀者の好奇心を満足せしむるのみに止まらずして、更に之に依りて現在に對する意見と、將來に對する豫想とを誤らしめない様にするに於て、初めて意味があるを述べて居るが、予が今後本誌に餘白の與へらるゝ限りに於て、各國の植民史の大綱を窺はんとするもの、亦實に此の主旨に他ならぬのである。

希臘・羅馬の遠き古へのことは姑く措き、近世に於ても西班牙・葡萄牙等の如きは、嘗ては世界に於ける二大植民國として、西班牙は西半球に葡萄牙は東半球に自由に植民的の活動を爲し得ることを、羅馬法皇より允許せられたる位であつたが、今日は既に其の勢力は全く去せて、植民國としては見る影もなき有様に陥つて居る、併し之を單に一片の植民史上に於ける過去の偉觀として看過すれば夫れ迄であるが、夫れでは何等現在の植民國に對する活教訓ともならねば、又其の將來に對する批判の參考の資料ともならぬ、現在が過去より生れたる以上は、未來も亦現在より生れ出でねばならぬ、故に吾

古代に於ける植民史訓

山本美越乃

英國に於ける最も獨創的の政治史學者として、又最も進歩的の帝國主義の論者として有名な、故ケンブリッヂ大學教授ゼー、アール、シーリー (Sir John Robert Seeley, 1834-1895) が、其の著『英國膨脹論』("The Expansion of England") の卷頭に、凡そ歴史の研究は單に過

人の植民史の研究は、過去・現在・未來に通じて何等の脈絡を有しない斷片的の事實の研究として、單に吾人の好奇心を満足せしむるのみを以て終りたくない、能ふ限り現在に對する意見と、將來に對する誤らざる豫想とを立て得る概念を之より得たいと考へる、此の如きことが果して歴史の研究の眞の目的であるか否かは、今之を詮索するの要はない、少くとも吾人の窺はんとする植民史に於ては、此の態度を以て研究を進めて見たいと思ふ、シーリーは英國史を學ぶは單に英國の過去を學ぶにあらずして、又其の將來を學ばんとするに在り、“When you study English history you study not the past of England, only, but her future” (The Expansion of England p. 174) と言つて居るが、吾人も亦植民史を學ぶは單に植民國の過去を學ぶにあらずして、又其の將來を學ばんとするに在り、“When we study colonial history we study not the past of colonial Empire only, but her future.” の一事を茲に緒言として置けば足るのである。

(註) シーリーの學說に關しては、小野塚博士著『歐洲現代政治及學說論集』二二九頁以下に簡潔にして有益なる批評が掲げられて居る、又其の名著『英國膨脹論』は本國に於ては固より、歐洲各國に於ても盛んに批讀せられたるものであつて、殊に獨逸に於ては之を中等程度の學校の教科書として、其の流麗なる文章と共に豊富なる思想を學生に玩味せしめたものである。

古代の植民國

(一) エジプト、一國の地理的事情が其の國の歴史的發展に重大なる影響を及ぼすことは、今更茲に事新しく述ぶる迄もないことであるが、殊に國民の對外的發展、換言せば其の移植民的の活動に至大の影響を及ぼすものは、其の國の水界に對する關係如何と云ふことである、有史前の人々は水界の利用と云ふことに付いては、殆んど何等の考へをも有して居らなかつたのみならず、人力を以ては到底之を如何とも爲し能はざるものであるかの如くに考へて居つた、併し人口の増加及び社會の進歩に伴ひ、從來の限りある陸上の發展のみを以ては次第に不充分となり、茲に何時しか通路を水界に求めて、其の發展の領域を擴張するの必要を感じしむるに至つ

た、而して古代に於て夙に水界を利用して對外的の發展を試みたる國としては、先づ第一に指を埃及に屈せねばならぬ、埃及人は元來勇敢にして冒險的思想に富み、既に紀元前三千五六百年頃より小亞細亞及び亞刺比亞地方と交通して、金銀寶石等の貴重品であるとか、或は今日と雖も尙ほ其の不足に苦みつゝある木材等を輸入して居つた、併し當時の海外發展の目的は、通商と云ふことが主眼であつて、別に領土的の目的より出でたるものではない。

埃及は希臘の史家ヘロドトスの言へるが如くに、ニール河の恩恵を受けることが頗る大であつて、土地が極めて肥沃である所から、假令人口の蕃殖力が旺んであつても、之を支ふるには何等の困難を感じなかつた、従て近世の意味に於ける移植民的の活動と云ふが如き事實は、古代の埃及人には之を見ることが出来なかつた、唯彼等の海外發展は自國に於て容易に得る能はざる物を獲んとするにあつたが爲めに、海外を征服するも土地の併合よりは寧ろ貢物の徵發を主

とし、又其の征服地は通商的に之を開發せんことに努めたる結果、税關・商店等の如きものは到處に設置せられ、商業に關する法令の如きものも屢々發布せられた、斯かる點より考ふる時は、古代の埃及人の海外發展は近世の商業植民に甚だ似たる所があると共に、又所謂商業植民なるものに伴ふ弱點をも之を有して居つた、即ち海岸又は河口等の通商貿易に便なる所には、比較的廣く本國の勢力を扶植することを得たが、深く内地に向つては其の勢力を及ぼすことを得なかつた、之が爲めに本國埃及の國運の衰ふると共に、海外に於ける人心も亦自ら離散するに至つた、要するに埃及人は海外に發展しても、其の發展地に對しては自由放任主義を探り、別には等の地方を政治的の從屬關係の下に置かんとするが如きことなく、唯通商交通を盛んならしむることを以て満足して居つたに過ぎぬのである。

ニカルヂア、 カルヂアは其の地勢ユーフラテス及びチグリス河に接し、且波斯灣に臨める所

から、國人は古くより水界の利用に注意し、不完全なる船を以て屢々難破の災厄に遭遇したるに拘らず、大膽にも危険を冒して波斯灣附近の諸國と通商交通を爲した、彼の有名な『世界の鐵鎚』(“Hammer of the Whole Earth”)と云ふカルデア人に對する異名は、其の大膽にして勇敢なる性質を言ひ表はしたものである、元來カルデア人は農工商の諸業に長じ、且航海者としても最も適性を備へて居つた、故に若し其の國民が今少しく深慮遠謀を有せしならば、必ずや古代の植民國として後世に其の範を垂るるものがあつたに違はぬ、然るに惜むべし彼等は單に自國の富強を圖ることにのみ汲々として、新附の民を遇するの途を知らなかつた、即ち彼等の目的は富の誅求に在つて民力の涵養に存しなかつた、一個人でも一國民にでも深き慮りと遠き謀なくして、唯單に富を收集することにのみ没頭する結果は、遂に奢侈・淫逸・腐敗・自滅の運命を辿り行くことは、茲に説明するまでもない、カルデア人は古代の亞細亞人中では、最も能く

文明の粹を蒐めた國民であつて、希臘の文藝・技術等は、カルデア人に負ふ所が鮮くないとまで稱せられたのであるが、併し其の植民的の活動に就いては、餘りに自國本位主義に流れたるが爲めに、埃及人と同じく後世に傳ふべき何者をも遺さなかつたのである。

三 アッシリア、アッシリアは地勢上より論する時は、埃及とかカルデア等の如くに水界利用の多くの便を有して居らなかつたが、好戦人種で兵を用ふることが極めて巧みなりし所より、自ら四方を征伏して領土を擴張することを得た、換言せばアッシリア人は平和的通商的發展者ではなくして、侵略的領土擴張主義の實行者であつた、而して此の如くにして獲たる新領土に對しては、又アッシリア一流の統治策を以て臨んだ、即ちアッシリアの中央政府と新屬領との關係は極めて自由であつて、通常は之を統治せしむるが爲めに知事及び若干の駐屯兵を置き、更に領土の擴張せらるゝに従ひ、附近の新領有地をも之を管轄せしむることゝし、又其の

必要を認むる場合には全く自治をさへ許した、唯新附の民は絶對的の服従・納貢及び兵役に服することの三大義務を守れば可いので、若し是等の義務を怠る時は劔の制裁を受けねばならぬが、其の他に於ては全く自由であつた、加之、アッシリア人は又新領土の民を自國に移住せしめ、反對に自國の民を新領土に移住せしむる一種の交代植民法を採用した、併し之は自國の人口が非常に多くして、新領土に移住せしむるも自國民の國民的結束方に、毫も緩みを生ずるが如き虞れのない場合には、新領土に對する母國の勢力の扶植上に效果なしとしないか、然らざる場合には、互に反目せる人種を混住せしむることは、自ら四分五裂の種子を播くに等しく、アッシリアは全く此の實驗の最初の犠牲者となつて倒れたのである。

(四) **メチア**、アッシリアの衰頽後之に代つて勢力を占むるに至つたメチア人の活動狀態に就いては、現今信據すべき記録の殘存せるものがない所から、之を詳かにすることを得ないが、諸種

斷片的の記事に依りて之を想像せば、紀元前六世紀頃には其の領土は小亞細亞の中部邊まで擴張せられて居つたことである、而してメチア人の新領有地に對する統治策は、アッシリア人の統治策と能く似たる所があつて、即ち本國に接近せる地方は之を本國政府の直轄となし、是等の地方をして更に其の隣接地を統治せしむると云ふが如くに、本國を隔るに従ひ其の統治は次第に間接となり、寧ろ隣接地の勢力の方が遙に大なるものがあつた、之が爲めに本國對新領有地間の關係は必ずしも密接鞏固なりと言ふを得なかつた、メチア人は直接本國に收入を齎す所の隣接地に對しては、特別の取扱ひを爲したが、然らざる遠隔の地方に對しては、武力の壓迫以外に毫も親しみの情を持たなかつたことが、久しからずして新附の民心を離散せしむるに至つた原因である、要するにメチア人は領土の擴張には成功をしたが、之が統治には失敗した、従て植民政策上に於ては特に記るに足るべきものかない。

(五) **ペルシア**、波斯人は最初は、メディア王の支配を受け、毎年朝貢を納むる一屬國の民たるに過ぎなかつたのであるが、後には之を亡ぼして其の領土を併呑し、更に隣邦リディアをも合せて其の勢力を小亞細亞に伸張し、進んでエーゲ海の諸島を略し、又南方に於てはカルデアを亡ぼし、更に西して埃及を征し、東は印度の西北部より北は露西亞の南境に至る迄、東西南北に其の版圖を擴張して一大帝國を建設し、啻に外部的に膨脹發展を遂げたるのみでなく、内部的にも是等の新領土の統治に大に力を用ひ、全領域を多くの州に分ち、州毎に長官を置きて普通の行政及び司法事務は之を長官に一任し、中央には別に監察官を置きて時々各州を巡回監視せしめ、又地方に於ける下級の官吏には成るべく土着人を採用すると共に、公安の維持に差支なき限りは、其の地方の風俗習慣等には餘り干渉を加へざる方針を採り、更に長官の勢力の大となるに従ひ、或は屬領の獨立分離せんとするが如き危険を生せんことを慮り、長官の他に別に司令官

を各州に置きて兵馬の權を委ね、互に相牽制せしむるの策を執つた、此の如き屬領統治策は非常に進歩したものであつて、近世各國の植民地に於て文官總督と軍司令官とを併置して、文武の兩權を一人に托することなく、之を分ち委ねんとする所の制度に相似たるものがあつた。

此の如くに中央の統一の權力が鞏固であり、又地方長官も互に其の權限を守つて相侵さなかつた時代には、叛亂の起ることもなく、治績も大に擧つたのであるが、歲月の經過と共に次第に中央の權力が衰へ、遂には一人にして文武の兩權を掌握し、即ち長官にして軍司令官を兼ねるか如き者の出づるに及んで、叛亂相次で起り、加ふるに最初は國民が質朴で氣慨に富み、文弱に流るゝが如き弊がなかつたが、各地を征伏して當時の文明國を併合するに及び、是等の國の文化が何時とはなしに輸入せられ、國民は次第に華奢の風に感染し、建國當時の元氣は日に消え失せつゝありし時に乗じてマケドニア人の侵略に遭ひ、終に二百年前に他國を陥し入れ

たと同様の運命に、今や自ら陷入らざるを得ざることとなつた。

斯くして有史以來屬領統治に關しては稀なる技倆を有して居つた波斯國民も、驕る者は久しからずその鐵則の支配は之を免るゝこと能はずして、遂に滅亡するに至つたが、併し波斯人は他の古代の國民と異なり、一種の教訓を後世の植民國に遺して行つた、夫れは比較的正直にして潔白であり、新附の民に對しては寛仁大度を以て臨み、仇敵と雖も妄りに酷遇するが如きことを爲さなかつたと云ふことである、而して之は全く波斯人の宗教的の信念から出て居る様に思はるゝ波斯人は世界には善 (Ahuramazda) 惡 (Ahriman) 二種の神があり、宇宙の萬物は其の何れかに屬せねばならぬが、人間が善行を積んで善神の味方をすれば死後に至る迄光榮を受け、邪惡の生涯を送れば死後に至る迄苦みを嘗めねばならぬと云ふことを信じて居つた、故にメデア人等の如くに殘忍酷薄なる行爲は敢てしなかつたのである、波斯人の宗教的の信念が迷信

であるか否かは茲に批判するの限りではない、唯夫れが時世人心を支配すること此の如くに大であつて、又其の結果が甚だ良好であつたとすれば、假令宗教としての眞の價值は疑問であつても、之は別に問題とするに足らぬのである。

以上述べたる古代の國民は、固より國に依りて多少の差異はあるも、要するに領土の擴張は武力に依り、又擴張せられたる地方の統治方法の如きも、經濟的富源の開發を主眼として、之に相應すべき統治策を講じたるものではなくして、全く帝國主義的の領土擴張策に便なる統治方法を行ふたと云ふに過ぎぬのであるから、現今の植民政策上に參考の資料となるべきものは殆んどないと稱しても可いのであるが、併し其の興亡の事跡は尙ほ吾人に教訓を與ふるものが決して少くないのである。